

任意団体

被災者と支援者、  
両方の目線で宮城と佐賀の橋渡し

仙台市

砂子 啓子 i-くさのねプロジェクト

取材日 2013.05.21

i-くさのねプロジェクト代表、生活協同組合あいコープみやぎ理事。一般主婦の目線からの支援活動を続ける。震災後、地元佐賀県から支援活動を始めた事をきっかけに、佐賀県と被災地をつなぐ橋渡し役を引き受ける。現在は宮城県宮城野区と岩手県陸前高田市を中心に活動をしている。

## 3月11日 14時46分

幼稚園から帰ってきた子どもをバスから引き取って、八乙女にある自宅マンションの8階の部屋に入った途端に地震があった。ドーンと大きな地鳴りのようなものが聞こえ、とっさに子どもと一緒にリビングにあるテーブルの下へ入った。建物を揺らして倒壊から守る構造だったので、家具がすっ飛んでいくほど大きく揺れた。テーブルの下でなんとかやり過ごし、家財をかき分けながらマンションを降りた。後日、マンションは全壊判定を受けた。強い余震が続いたのでマンションにいては危ないと思い、近所の避難所で2日間ほど過ごした。

当時は子どもが2歳と4歳だった。家の中を片づけるにしても、この2人の子どもがいる状態だと危なかった。主人の実家が東京で、私の実家は佐賀だ。東京か九州かどちらに帰ろうか迷っていた時に、福島原発が危ないから離れられるだけ離れた方が良くとメールが来た。私はあいコープみやぎの理事をしていて、あいコープでは以前から原発についての勉強をしていた。そのため放射能に詳しい友人が多く、東北に残る人は家の外に出るな、外出するならばレインコートを着用した方がよい、可能ならば東北から避難しなさい、などさまざまな情報が入ってきた。

その時は爆発はしていなかったし、テレビも見られないから原発の事故については半信半疑だった。けれども万が一を考え、とりあえず九州に1回帰ろうと主人と相談をした。12日の夜、ラジオで山形空港から東京に向けて1便だけ臨時便が出る事を聞いて、山形空港に向かった。主人は水道関係の仕事をしていて忙しかったので、宮城に残ってもらった。なんとか臨時便に乗る事ができ、東京から佐賀へ帰ったのが13日の事だった。佐賀に帰ってから津波の映像を見てびっくりした。それまでは避難所にいたので津波の映像を見たことがなく、自分達の事で手一杯だった。沿岸部の人達はいったいどんな状況なのだろうと心配になった。



## 佐賀から仙台への物資支援

佐賀に帰ったら、宮城にいるママ友達から物資を送ってほしいとたくさんメールをもらった。救援物資はアルファ米や乾パンが主なので、子どもは食べてくれない。フレッシュなものは手に入らず長期化するほどに栄養が偏るので、子どもに飲ませる野菜ジュースや果物の缶詰、それに女性の生理用品や服、下着類を送って欲しいと、緊急支援の物資では得られない物を求める声が寄せられた。

翌日、すぐに県庁に向かった。まだ郵送が止まっていたが、県庁からなら送れると思ったからだ。私は仙台から佐賀へ避難してきていて、仙台の知人から困窮している現状を直接聞いている事を説明した。子どものための野菜ジュースや女性のための生理用品などは絶対に必要なもので、避難が長期になってしまったら栄養失調の人が出てしまう。非常食だけではなく被災地のお母さん達が必要としているものの募集をかけて欲しいと伝えた。しかし、宮城県から要請が来ているものしか送れないからできないと断られた。

危機感と焦りを覚えた。せっかく助かった人も、このままでは何日かしたら死んでしまうのではないかと思った。この状況で乳飲み子や小さな子ども、彼らを育てているお母さんの事を考えると、いてもたってもいられなくなった。調べてみると、

九州にある西濃運輸では、仙台市若林区にある支店に荷物を届ける事ができるとの情報を得た。そこで、必要とされそうなホッカイロやウェットティッシュやビタミン剤などを大量に購入した。西濃運輸の支店の近くにはあいコープみやぎがあり、あいコープみやぎにいる職員はあちこちにいる組合員を知っている。物資を届けてほしいと話を通して、こちらから送った荷物を職員に受け取りに行ってもらい、組合員に届けてもらった。しかし、これだけでは埒が明かないし、自分のお金だけではどうしようもなかった。遠くにいて余力があるからこそ、何かできないかと思い始めた。

## i-くさのねプロジェクト発足

何をするにしてもまずは団体が必要だ。一般市民の立場と考えた時にピンと来たのが「草の根」だった。「人づてにつながっていく」という意味を含めて、団体名を「i-くさのねプロジェクト」と決めた。iという字はあいコープの理念にとっても共感をしていたので、iの字をいただいた。

i-くさのねプロジェクトという団体名をつけてすぐに、仙台から九州に避難をしてきていて、現地に必要な物資を届ける活動をしているので取り上げて欲しいと、佐賀新聞に駄目元で連絡をした。すぐに連絡が来て、新聞に掲載してもらう事ができた。新聞掲載を通してつながったのが、「佐賀から元気を送ろうキャンペーン」を実施していたNPO法人地球市民の会だった。NPO法人地球市民の会はいち早く支援活動を行なっていたので目に止まったようだ。会の方から、いろいろな場所で講演をしながら支援者を募る提案を受けて、引き受ける事にした。

たった3日間の震災経験談だったが、各地で講演を行なった。中学校や婦人会などを回り全部で15回ほど講演をした。最初の1年は反響がとても大きかった。震災の実際の現場や、地震の揺れの状況をまったく知らない人が多い。ヘドロの臭いがすごい事、港町では津波によって魚が入り込み家に住めなくなってしまう人の話をすると、「そんなの知らない、分からない」と反応が返ってきた。遠いところの出来事と捉え、実感がないだろうけれど、佐賀も他人事ではない。佐賀は地震の少ない地域なので、私達は大丈夫と考えている人が多い。しかし災害は地震だけではなく台風もあるのだから、自分の地域の防災対策に関心を持ち、家族の避難先を決めておくと、いざという時に役立つ事を伝えた。テレビや新聞で見る情報は本当に少しの情報量なので、私が被災地での日常について話す事で、気づく事がたくさんあったようだった。講演が終わると、必ず家庭の防災対策を見直そうという話題になった。また、「砂子



佐賀大学文化教育学部附属中学校の生徒がメッセージ入り雑巾を東北へ送る

さんのような一般の主婦の方でも支援活動をしているのだから、自分達もできる事はやろう」と言ってくれる人も多かった。

佐賀は狭い土地なので一度新聞に出ると名前が広く知れ渡る。それがきっかけでNHKなどいろいろな媒体から声をかけていただき、たくさんの情報を発信する事ができた。

## 佐賀と東北の橋渡し役

佐賀で講演をしながら支援を募る際に、支援金はどういう使われ方をしているか分からないと集まりにくいと言われた。私が佐賀と東北の間に入り、支援品が被災地で使われている現場を写真などで報告すれば、目に見えてつながっている事が分かる。佐賀と東北の橋渡し役をお願いしたいという話をいただき、もともと仙台に戻るつもりだったので引き受ける事にした。あちこちで支援金を集めながら大震災から半年後に東北に戻ってきた。東北に知り合いがいる佐賀の人はとても少なく、東北に来てボランティアをしたい思いがあってもどこの団体に問い合わせたらよいか分からない状態だった。私も住んでいる場所が沿岸部から遠いため、沿岸部の方とつながりを持っていなかった。そこで、私は佐賀の出身で佐賀の人たちと東北をつなげてボランティアを派遣している事を伝えて、一生懸命ボランティアの受け入れ先を探し回った。なかなか受け入れ先は見つからなかったが、いくつかの団体から良い返事をもらう事ができた。うまくマッチングする時はお互いにピンとくるもので、良い橋渡しをする事ができたと思う。ボランティアの受け入れは、ボランティアを希望する人と受け入れ先の間に入るコーディネーターがいるとスムーズにいく事が多かった。佐賀の人達は支援したい思いは強いが、東北の状況はまったく分からない。そのため、いきなり引き合わせると「そんな支援は的外れだ」と怒られてしまう事もあった。お互いに強い思いがあるのに、通じ

合わない事がとてももったいない。私は佐賀の人の支援したい気持ちも分かるし、東北の人の大変な気持ちも分かるので、両方の気持ち分かる私が間に入って、仲介役をやりようと思った。

佐賀の子ども達が、メッセージ入りの雑巾を約1,000枚作ってくれた。これなら邪魔にならないし、メッセージも入れられるから良いと考えた。その時は受け入れ先がなかったので配布して回った。最初は、被災者の方もそれどころではないと言っていたが、実際にメッセージの入った雑巾を貰うと嬉しかったようで、喜んでもらった。福島ではセシウムが水に吸着するので、少しでもセシウムを抑えたいと一生懸命水拭きをしていたお母さん達に重宝された。お母さん達からも喜ばれるような、主婦目線を心がけた。

## 佐賀と東北をつないだ酒 「絆伝心」

登米市に「イセヒカリ」という無農薬で栽培されている貴重な酒米がある。酒米を調べてもセシウムは不検出で、土壌からも検出されなかったが、大手の酒造会社からその年は契約を打ち切られてしまった。契約を打ち切られた生産者の方は幼い子どもを抱えて路頭に迷ってしまっていた。どうにかできないかと佐賀の皆さんに相談をしたところ、佐賀に古くからある天吹酒造という酒屋が手を挙げてくれた。当時は瓦礫受け入れ問題で揉めていたにも関わらず、調べて不検出だったなら問題ないとイセヒカリを買い、お酒を造ってくださった。それも、3年間は造り続けると決心して受け入れてくださった。佐賀の名物である苺の花びらを酵母に使ったお酒は、復興酒として「絆伝心」と名づけられた。和紙のラベルやシールはボランティアが手作業で全部貼ってくれている。「絆伝心」は新聞で大きく取り上げられた。その後、契約を打ち切った酒造会社が生産者のところにいらして、来年以降の契約再開を打診なさったそうだ。おかげで生産者は農家を続けられる事になった。佐賀の人が動いてくれたからこそその出来事で、本当に嬉しく思っている。

## 大きなNPOにはない身軽さ

現在は、仙台市宮城野区の高砂地区の方々、石巻、福島、陸前高田の仮設住宅に住んでいる女性とつながっている。

陸前高田は津波の被害が大きく、長い間米の食事が続いていた。子ども達はパンが大好きなのになかなか口ができないと聞き、ホームベーカリーを送る事にした。集会所でどんどん焼いて、皆で食べた。大変喜ばれた。そうした草の根の活動の中



撮影：2011.12 岩手県陸前高田市 仮設住宅で全世帯のケーキを手づくり

で、「靴下が欲しい」とポロッと言われれば届ける。大きいNPOには言えないようなちょっとした主婦の願いを聞いては届けていた。

私の活動の強みはとにかく速い事だ。大きな団体は会議を重ねた上で決定されるから、被災者に届くまで時間がかかってしまう。私の場合はしっかりした団体だと判断できればすぐにお金を渡す事ができる。煩雑な手続きがなくスピーディな性格の活動は重宝され、あちこちから声をかけてもらっている。結局、人と人の付き合いの活動だ。だからNPOではないが、本当に信頼関係と絆での活動を行なっている。

## 活動を振り返って

立派な方もいるが、すべての大人が「大人」ではない事が分かった。今までは50～60代の年上の人達に頼っていれば大丈夫と思っていた面もあるが、大震災という混乱の中で本当に頼れる人はいなかった。今の現役世代である自分達が考えて行動しないと駄目なのだと気づいた。地震や津波は自分のせいではないけれども、「俺が悪いんじゃない、こうなってしまったのは国が悪い」と言っても仕方がない。けれども人のせいにする人や、他人任せにする人がとても多かった。確かに今回の震災は大変な事だったけれども、人任せにせず自分で動く事の大事さに気づき、人に頼らない責任感を持つべきだ。誰かが悪いと言っている間は立ち直れないし、一步を踏み出すことはできない。原発の話にしても、本当に原発を廃炉にしたいと思っているのなら、反対派の人達はもっと違うやり方で活動をしなければならないはずだ。反対と意思表示をするが具体的な事案は少ない。自分の理想やプライドを横に置いて、覚悟と責任を持って行動したい。国も企業も市民も皆で考えていかなければ、社会の在り方が見直される事はないだろう。